

宇宙開闢の歌 リグヴェーダ 10.129（辻直四郎訳）

10.129.1 そのとき（太初において）無もなかりき、有もなかりき。

空界もなかりき、その上の天もなかりき。

何物か発動せし、いずこに、誰の庇護の下に。深くして測るべからざる水は存在せりや。

* 「有」サンスクリット原文では、sat-：動詞 as 「存在する」の現在分詞、中性単数「存在している[もの]」。「無」は asat- (a-は名詞・形容詞に付く否定辞) 「存在していない[もの]」

* 動詞 as は「存在する」、同時にコピュラ（英語でいう be 動詞）。

* 「ではない」（という区別）が存在しなかった。「である」（という積極的定義）も存在しなかった。

- この状態では、有と無がシームレスにつながっていることが示されている。4で詩人によって切り離される。

- ○○がない、は、差異が存在せず、輪郭がない、差異がなく混沌、という状態を表していると考えられる

- 「非想非非想処」思うでもなく（非想）思わないでもない（非非想）という境地。禅における最高の境地。

* 「ではない」が最初に来る

アポーハ（排除）論：ディグナーガ、ダルマキールティの仏教哲学

「牛」とは「非牛性」の排除の結果現れるもの。

10.129.2 そのとき、死もなかりき、不死もなかりき。

夜と昼との標識（日月・星辰）もなかりき。

かの唯一物（中性の根本原理）は、自力により風なく呼吸せり（生存の徴候）。

これよりほかに何ものも存在せざりき。

* 自力 svadhā-; 5 の「自存力」と同じ単語（5では複数）

- 死が無に、不死が有に対応しているのか。無とは何かが消滅すること、有とは何かが永遠に消滅しないこと。
- 呼吸ではまだ出生の条件を満たしていない。次の「熱」によって出生する。
- 生物であるように表現されているが、生物ではなくエネルギー源（光）
 - *熱=体内に火がある=命がある、という概念は、リグヴェーダより後のブラーフマナ文献では明確になる。
- 「かの唯一物」が世界を照らし、見ることや考えることを可能にした。
 - *サーンキヤ哲学のプルシャ（精神原理）が「見る」ことでプラクリティ（物質原理）が展開するのに似ている。

10.129.3 太初において、暗黒は暗黒に蔽われたりき。この一切は標識なき水波なりき。空虚に蔽われ発現しつつあるもの、かの唯一物は、熱の力により出生せり（生命の開始）。

- 暗黒と水は、「区別がない混沌」の比喻で、物質存在ではない
 - 「かの唯一物」とは精神的なもの *4の「思考」?!
 - 熱の力によって、物質に自律的な方向性をもたせる、これが「精神」
 - 熱、風、水（生命の根源）はもともと存在していたが、これだけでは世界が想像されたとは言えない。言葉の誕生と世界の認識によって、はじめて世界の創造と言える。
 - 四元素「水」「風」「火」「地」?
 - *サーンキヤ哲学：根本原質（prakṛti）の三つの性質（triguṇa）：
 - sattva 純質, rajas 激質, tamas 暗質
 - 水～純質、息・熱～激質、闇～暗質 ?
- この3つのバランスのくずれから様々な世界の構成要素が天界する。その中に、五大元素が含まれる（水、風、火、土、空）

10.129.4 最初に意欲はかの唯一物に現ぜり。こは意（思考力）の第一の種子なりき。詩人ら（靈感ある聖仙たち）は熟慮して心に求め、有の親縁（起原）を無に発見せり。
 *それ（かの唯一物）は最初に意欲として現れた。
 それ（意欲）は思考力の/にとって第一の種子であった。
 *意欲が思考力から生まれたとすれば、かの唯一物は思考力（のもと）
 *思考が意欲から生まれた、という解釈もできる。

- 有が無の親縁であることを発見した。つまり両者とも原初に存在しているということ。
- 唯一物が発生し、有が発生したことで、無の概念が見出された。
- もろもろの存在物（有の親縁）を、無から切り離して、発見した
- 詩人が思考力を用いたことで、有と無が区別され、創造のもとである射精者や広がりを生み出した。次の詩節5は、詩人による創造。
- 「欲」は「意、思考」がはたらくための原動力
- 「欲」は「生きたい」、「思考」は「いかに生きるべきか」
- 思考によって、物事の区別、自他の区別ができ、そのことから欲求が生じた

* 自他の区別があることによって欲望が生じる、というのは、ウパニシャッド、仏教に通じる考え方。梵我一如とは「自他の区別のない」状態。

* サンスクリット kāma-. 願望、欲、愛欲、など、様々な意味で用いられる。

否定的に扱われることもあるが、中立・肯定的に扱われることもあり。

ウパニシャッド（ヤージュニャヴァルキヤの輪廻論）は kāma- を否定的に扱い（梵我一如の唯一の条件として kāma- から離れることを説いた）、仏教もそれに近い立場をとる。

- 「思考力」は、他の生命体と人間とを分かちもの。人間は思考力を持つより高次の生物。

10.129.5 彼ら（詩人たち）の縄尺は横に張られたり。下方はありしや、上方はありしや。
 射精者（能動的男性力）ありき、能力（受動的な女性力）ありき。
 自存力（本能、女性力）は下に、許容力（男性力）は上に。

* 縄は彼ら（詩人たち）によって水平に張り渡された。

創造を、水平方向の広がりとして捉えている？

下方はあるのか、上方はあるのか → 上下はない

* 射精する者たち（複数、男性名詞）、

能力～偉大さ、広がり（複数、男性名詞）、

自存力～自ら生じる力（複数、男性名詞/女性名詞；この場合区別できず）、

許容力～差し出すこと、力（単数、女性名詞（抽象名詞））

* 自存力は上に、許容力は下に：avastāt / parastāt は、上に下に、ではなく、「こちら向きに」と「あちら向きに」。

「自ら生じる力、自然と生じる力」が「広がり～生み出す母体」に働きかけて生み出し、
 「差し出す力」は外側に向けて広げる（射精する者たちを？）ような働き？

- 自存力が種子（複数）で、許容力が卵（単数）
- 「自存力」が生み出す力で、「差し出す」が精子を差し出す男性原理。
- 縄を水平に張るのは、世界を二つに分け対立構造を作ること、そこから男性原理と女性原理が生じる。
- 「水平方向に張られた縄」は、有と無、男性原理と女性原理の二項対立が生み出され、両端を引きあう力になったことを示している。この「力の方向」「ベクトル」を表すのが、自存力と許容力

* 許容力、差し出す力、ある種の推進力か。

- 引っ張ることにより、シームレスにつながっていたものに差異を生み出し、それがものを形作るもととなる。
- 世界はもともと水平で、神々が昇ったことにより「天」ができた
- * 神々はもとは地上におり、天界に昇ったと考えられている。
- 水平方向への広がり：質的な向上のない繁殖（動物としての人間に備わった生命力）思考によってはじめて、質的に上方への創造を果たした。
- こちら向きが凹、あちら向きが凸？

- 自ら生じる力「差し出す力」は男性力、しかし名詞としては女性形。

サンスクリット語の名詞の性はどうやって決まっているのか？

* 印欧祖語の性をうけついでいるもの（nau-船, 女性名詞）などもあるが、多くは語形成に用いられる接尾辞によって自動的に決まる。抽象名詞を作る-ti-接尾辞が付くと女性形。-is-, -us-, -as-, -tra-などが付くと、自動的に中性。「女性的」「中性的」と考えられるものが、その性になることも珍しくはない。

* 「世界の創造」は詩人の仕事！つまり、詩人が思考によって諸存在を別々のものとして認識したことが、世界の創造

10.129.6 誰か正しく知る者ぞ、誰かここに宣言しうる者ぞ。

この創造（現象界の出現）はいずこより生じ、いずこより〔来たれる〕。

神々はこの（世界の）創造より後なり。

しからは誰か〔創造の〕いずこより起りしかを知る者ぞ。

10.129.7 この創造はいずこより起こりしや。

そは〔誰によりて〕実行せられたりや、あるいはまたしからざりしや、
 ——最高天にありてこの〔世界を〕監視する者のみ実にこれを知る。
 あるいは彼もまた知らず

- 語りの視点が人間。全知ではなく、わからないものをわからないとして残している。
- 「世界を監視する者」とは誰なのか。

- 性的なものに神秘を見出している？ cf. カーマストラや、タントラ（秘儀）など
 もともとは大真面目。生命の誕生について真面目に語っている。遊牧民なので、すべて家畜の
 繁殖になぞらえて考えている。

リグヴェーダの訳について

- これほどまでに解釈の余地のあるものなのか。訳の文体は、原文のニュアンスを残すため？

讃歌（韻文；サンヒター） リグヴェーダ、アタルヴァヴェーダ 15CBCE ~ 10CBCE

祭式説明（散文；ブラーフマナ） マイトラーヤニー・サンヒター 9C ~ 7C BCE

カタ・サンヒター

タイッティリーヤ・サンヒター

タイッティリーヤ・ブラーフマナ 7C BEC 頃

シャタパタ・ブラーフマナ

リグヴェーダ、アタルヴァヴェーダ編纂期以降に、祭式が盛んになり、定期的になったり、大規模な祭式へと発展したりした。祭式に用いるマントラや所作、道具の一つ一つが細かく規定されるようになり、それらの知識を持っているバラモン（祭官）の力が大きくなる。

リグヴェーダで語られる神話は、祭式行為を行う際の根拠となった（リグヴェーダ権威主義）。世界の成り立ちや、死後の世界についての思索が盛んになり、議論も活発になっていったと考えられる。

そのような、祭式におけるマントラや所作の規定と、その根拠についての議論がまとめられたのがブラーフマナ。

シャタパタ・ブラーフマナ 10.5.3 は、アグニチャヤナ（火壇積み）の祭式説明。そこで、リグヴェーダの宇宙開闢の歌を解釈しつつ引用している。

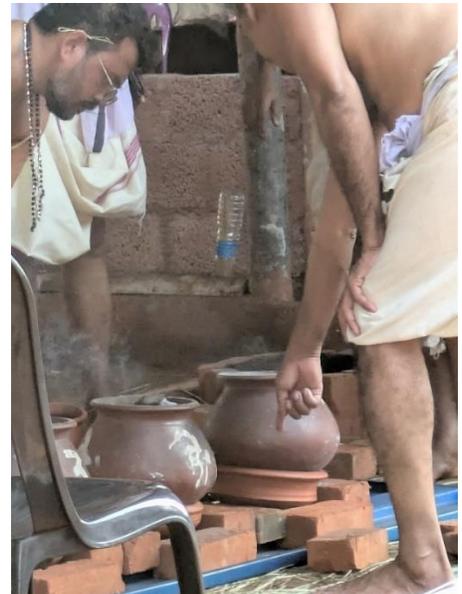
*アグニチャヤナ

鷲の形に五層のレンガを積み上げ、その上に祭火を設置して、献供を行う。

火壇を完成させて、ソーマ祭（興奮性の成分を含む植物の汁を絞り、飲んだり献じたりする；リグヴェーダの長い詠唱や、サーマンと呼ばれる歌の歌詠を伴う）を行う。



レンガを積んだ火壇



火をいれる火壺



ソーマを祭官たち皆で飲んでいるところ

火壇の上に置く祭火にするための火は、一年前に用意し、一年間祭主が保っておく。祭式の記述は、火を保っておくための壺を作るための土を取りに行く場面から始まっている。土を取りに行くために、驢馬と馬を一頭ずつ連れて行く。なぜ驢馬が必要なのか、なぜ馬が必要なのか、など、儀礼における行為の一つ一つについて説明している。

大量のレンガを置くが、その一つ一つに意味がこめられ、その意味を込めたマントラを唱えながら置いていく。

シャタパタ・ブラーフマナ 10.5.3

この[世界]は、太初において、言うなれば存在しないものとして存在するわけでもなかったし、存在するものとしても存在するわけではなかった。この[世界]は言うなれば存在していたし、言うなれば存在していなかった。そのときそれは他ならぬ *manas*（思考力）として存在していた。

それゆえリシ（昔の聖仙）によって次のように言われている、「[この世界は]存在していないものとして存在していなかった、存在しているものとしても存在していなかった（リグヴェーダ 10.129.1）」と。というのも、思考力は言うなれば存在しているでもなく、存在してなくもないから。

そしてこの思考は創出されると、明らかになりたがった。より明言されたもの、より形のはっきりしたものになりたがった。そして本体（アートマン、「自分自身」の意味もある）を欲した。苦行（熱行）を行った。それは固まり始めた。

* *ātman-*、アートマン「個我、個人の原理」という重要な概念となるが、本来の意味は「自分自身[の身体]」、あるいは「本体、胴体」（「四肢」に対して）。ここでは、形があり言い表すことのできる「本体」を意味していると思われるが、アグニチャヤナ火壇の中心部分を *ātman*「本体、胴体」と呼ぶため、火壇作りともかけている。また、創造神プラジャーパティは、子孫を生み出したいと願ってもパートナーがいない（世界に唯一のものとして存在していたから）ので、「自分自身」と性交を行うとも考えられ、その表現ともかけている。

* 「苦行」 tapas-、もとの意味は「熱」。苦行は「自分自身を熱する」と表現される。

それ（思考）は 36,000[のレンガ]を見た（観得した）、それ自身[から生み出された]、輝きと[称される、アグニチャヤナの]火壇を、思考から成り、思考によって積み上げられた[火壇]を。

それら（火壇）は、他ならぬ思考によって設置され、思考によって積み上げられた。思考によってそれに際して[ソーマが]汲まれた。思考によってストーマ（歌詠）を詠い、思考によってシャストラ（詠唱）を唱えた。

* ストーマが、サーマヴェーダ系の祭官（ウドガートリ）が詠う歌詠で、シャストラが、リグヴェーダ系の祭官（ホートリ）が唱える詠唱。

祭式において行われるいかなる行為、祭式に関するいかなる行為も、思考から成り、思考によって積み上げられた[火壇]において、思考から成るものとして作られたのだ。

思考によって構想された、この地上のどんな存在も、それらにとってはそれ（アグニチャヤナ）が作る行為である。

そういう[火壇]を設置していることになる、そういう[火壇]を積み上げていることになる。そういう[火壇]のところで[ソーマを]汲んでいることになる、そういう[火壇]のところでストーマを詠っていることになる、そういう[火壇]のところでシャストラを唱えていることになる。

思考の展開とはこれくらい[大きな]ものなのだ、思考の創出とはこれくらい[大きな]ものなのだ、思考とはこれくらい[大きな]ものなのだ、[つまり]36,000の輝き[と称される]火壇の大きさというのは。

それらの1つ1つが、かの東の[火壇]（アグニチャヤナのメインの火壇）の大きさを持つのである。